



浅川(下宮河内町)

水の思い出 54

浅川の谷の岸に金砂本宮(かなさもとみや)神社があります。大同元年(806年)近江の日吉神社の分霊を金砂神社に迎える際、仮にここに安置したと伝えられ、千二百年余りの歴史を有する由緒ある神社として知られています。この地は、古くは御鎮山(ごちんざん)と呼ばれましたが、現在は御真山(ごしんざん)に変わり、呼び名はお真山(しんざん)となっています。

神社に向かって左側をおりると浅川の岸に至り、向こう岸には大きな石の穴が口をあけています。この石のあたりの底は深く、水が渦巻き、波が寄せ、近づくことは容易ではなく、また石穴の左側には金色に光る黄銅鉱を見つけることができたそうです。

昔、子どもたちにとっては川は魅力ある遊び場でしたが、「この淵は海までつながっているから近づくな」と脅かされたそうです。それでも、大きい子たちと一緒に魚釣りや水遊びを楽しんだ思い出を持つ人は多かったようです。

「浅川上流谷あい生まれ育った自分にとって、山と川での遊びは何物にも代え難い、子どもの頃の思い出である」と地域の先輩から聞きました。この淵の少し下流には大堰があり、「滝を利用して水車が回っていた大堰には大きな亀が棲んでいる」といわれここでの遊びは御法度だったとか。

浅川で子どもの頃遊んだ思い出のある人たちが昔のきれいな流れを取り戻そうと、今年から「浅川を守る会」という活動が始まりました。岸にうっそうと茂る竹を伐採したり、流れ着いたゴミの除去に取り組んでいます。子ども時代の思い出は、年を経て地域を想う力となっていくのだと感じました。(鴨志田弘子)

校歌をめぐる



「校歌」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。
懐かしい故郷の風景？先生や友だちの顔？それとも汗を流した部活動…？
春のフォンスでは「校歌」をめぐる物語をご紹介します。（会沢 栄一・相原 早苗・関根 悦美）

歴史的に貴重な「訂正」

校歌にまつわる物語を調べている際に、旧町屋小学校校歌の「訂正 大町桂月」という一文を目にしました。「訂正」とそれに関わるお話を、校歌の歴史に詳しい、中村洋一さんに伺いました。

■「訂正」の大町桂月とは

明治二年、現在の高知市永国寺町で生まれました。明治・大正の詩人・随筆家で、紀行文の第一人者として有名です。心から自然を愛し、青森で終焉の時を迎えるまで、全国各地を旅しました。

大町桂月は、作詞をした伊藤正弘と共に東京帝大に学び、伊藤正弘が太田一高に赴任すると、度々太田を訪れ、町屋や持方集落、奥久慈方面へも足を伸ばしました。その時道案内したのが太田一高生でした。奥久慈の豊かな自然に感嘆して「天下的の風景」と称賛し、全国にその名を広めたのは大町桂月だったのです。

親友だった伊藤正弘から、校歌の歌詞について意見を求められると、立派だと褒めた上で、「～の如く、改めては如何。」と返事の手紙を送ったということです。

旧・町屋小学校校歌に「訂正」として、大町桂月の名が残っているのは、由緒深く、歴史的にも貴重です。

■「真の教師」伊藤正弘先生について

作詞の伊藤先生は、大町桂月と同じ、土佐の出身で、太田一高創立当初に赴任され、退任されるまで、同校で教諭・教頭・校長（第四代）と勤め、太田一高の校歌制定の他、市内外の小学校からも校歌の作詞を依頼されました。大町桂月の他、小川芋銭など文人墨客とも親しく交流しました。

また、生徒をこよなく愛した先生は、生徒たちからもたいへん慕われ、大正十四年に退任した時には、生徒たちが先生に新居を一軒贈ったというエピソードが残っています。先生の胸像は、墓所である帰願寺にあり、今も静かに学校を見守っています。

教え子が榮えゆく末を楽しみに
われはくちなむ太田の里に

歌集「^{あざみ}鮎の花屑」の中には先生が生徒たちを思う気持ちを見ることが出来ます。

<p>三、 学びの道に 君と親とに 動かぬ御代の 後の世までも</p> <p>身を入れて つくしつづ 礎と 仰がれん</p>	<p>二、 山より黄金 畑に煙草も 類希なる 磨けば光</p> <p>出ずるなり 生うるなり まだら石 いやまさる</p>	<p>一、 高鈴山や 向かいて立てる 流れるる川の 世にすぐれたる</p> <p>黒磯や その中を 水清く わが村よ</p>	<p>旧、 町屋小学校々歌</p> <p>作詞 伊藤正弘 訂正 大町桂月 作曲 田村虎蔵</p>
--	---	--	--



帰願寺（栄町）にある伊藤正弘先生の碑



墓石の隣に建つ伊藤正弘先生の胸像

世代をこえたメロディー

幸久地区敬老会での心温まるできごとをご紹介します。

敬老会のゲストとして登場した、常陸太田大使のヴァイオリニスト竜馬さんは、参加した皆さんが喜びそうな曲をと、童謡「里の秋」名曲「情熱大陸」、瑞竜小学校の桜「瑞桜」をイメージして作ったオリジナル曲「竜桜」などを演奏してくださいました。

素晴らしい演奏が続き、最後の曲に「皆さんご存知の曲です。一緒に歌ってください！」と竜馬さんが演奏し始めたのは、85年程前に作られた「幸久小学校校歌」でした。会場のあちらこちらから、ざわめきと拍手が起こりました。歌声も聞こえます。演奏が終わってからは、「歌えたよ」「覚えてたね」という会話がそこここでわきあがりました。まるで、自分が学校に通っていた頃にタイムスリップしたかのような笑顔が会場に溢れました。

その場にいた、すべての人の心の中に、世代をこえて、同じメロディーが生きている！あらためて、「校歌」と心のつながりを実感したできごとです。

幸久小学校校歌

伊藤 正弘 作詞
小松 耕輔 作曲

一、流れも清き 久慈川の
岸にそいたる わが村は
名さえ幸久の 幸多く
字は五つを 数えたり

二、梵天山を 西にして
みわたすかぎり はるばると
続く平野は 土こえて
秋の実りぞ たのもしき

三、石を枕に 雪の中
苦行のひじり しのばるる
大心海の その銘は
やがてわれらが 教えなり



常陸太田大使の竜馬さん



竜馬さんの演奏に聴き入るみなさん

「校歌」について思うこと、伝えたいことは？

校歌には、その学校をめぐる歴史、子どもたちへの願い、学校への期待などが込められています。そして我々に生きる力を与えてくれるものです。

パーティホールの緞帳の原画を描いた加倉井和夫氏も、苦しい時には出身校である太田一高の校歌を歌い励まされたそうです。

このように、苦しい時も嬉しい時も、校歌を思い出せば胸熱くなるのは、誰もが同じではないでしょうか…。また、太田市内の学校の校歌と、有名な文人たちとの関わりを知ることも大切なことだと思います。



元市教育委員会教育長
中村 洋一さん

生徒が作った心の校歌

「染中（染和田中学校）の応援歌を作りましょう！」音楽教諭、^{さかなり いっ}阪成以津先生の呼びかけで、詩と曲の募集が始まりました。生徒たちの応募の中から、大須賀千恵子さん（当時二年生）の詩と、遠藤賢司さん（当時三年生）の曲が選ばれ、1961年に誕生したのが、この「応援歌」です。当時、校歌が無かった染和田中学校では、全校集会や



阪成以津先生

壮行会などで、校歌の代わりに全員で唄いました。誕生から50年、作詞をした大須賀千恵子さんと、作曲をし現在も純音楽家としてご活躍の遠藤賢司さんに、お話を伺いました。

旧 染和田中学校 応援歌

<p>我が母が がばれ が力 がまぞ いまは 染中は ゆうかに 清らかに 山田のな よんでの みどりの</p>	<p>風が ながれ る の 風が</p>	<p>作詞 大須賀千恵子 作曲 遠藤賢司</p>
---	--------------------------------------	------------------------------



旧染和田中学校校舎

大須賀千恵子さん

■阪成以津先生との思い出は？

先生は、幅広い知識で、熱心に時には厳しく指導してくださいました。

「音楽」といえば、聴いて覚えるというのが主流だった当時、先生のご指導で初めて譜面を読むことや、偉大な作曲家や楽典などを知ることができました。先生との出会いは、とても印象深く心に残っています。

また、先生は生徒たちだけでなく、人と人とのつながりを大切にしていました。退職後、県外へ引っ越した後も、毎年必ず帰省しては、教え子や共に教鞭をとった先生方との交流を忘れなかったということです。

■詩が選ばれた時は？

嬉しかったです。大きな発表会は、ありま

せんでしたが、全校集会などで全員で唄うのを聞いたときは、何とも言えない気持でした。

その歌詞については、記録がどこにも無かったので、当時曲を応募した根本さんのご協力が一番だけですが思い出すことができました。懐かしさと嬉しさがよみがえったようでした。



「賞品ですか？ノートくらいだったかしら」と当時を思い、笑顔の大須賀さん（写真右）と阪成先生の姪 川又勝子さん（写真左）。

遠藤 賢司 さん

■曲が選ばれた時のこと…

警察官だった父の転勤で、中学2年生の時に染和田中学校に転校しました。

この詩に曲をつけてみましょうと応援歌の歌詞が配られました。元々、音楽は好きだったので、自宅にあった木琴で、毎切日当日に曲を作り、走って登校し坂成先生に提出したのを覚えています。

数日後、雨上がりのぬかるんだ校庭で、「新しい校歌です」と配られた一枚の謄写版印刷に「作曲・遠藤賢司」と書かれているのを友達が見つけて、自分の曲が選ばれたということ、その時初めて知りました。

また数日後、野球部の壮行会で、全校生徒が唄うのを聞いた時は、嬉しかったです。

初めて、頭の中で音符を組み立て、楽譜を書いたのですから、今思えば、音楽制作の第一歩といえる大切な一曲です。

■少年時代を過ごした「太田」の印象は？

「太田」は、のんびりした、あたたかい、挨拶の音がどこでも聞こえる「友だち」のような町。太田一高に在学していた時、友人に誘われて若宮八幡宮で生の「越天楽」に出会いました。この時の経験が、デビューシングル「ほんとだよ」の原画になっています。

このように、曲を作るとき、その原点には小さい時に聞いた



遠藤 賢司さん（純音楽家）

た電車の音や、祭りの音があると感じます。若い世代の人たちにも、故郷の言葉や、先祖から受け継いだその地方特有の暮らしやリズムを大切にしてほしいと思います。

そのためには、私たちの世代が良いところを知り、伝えることが大事です。

■プロフィール

1947年1月13日、茨城県勝田市（現ひたちなか市）生まれ。

1969年、自作曲「ほんとだよ／猫が眠ってる」で、シングルデビュー。

シンガーソングライターと言う言葉も無い時代、生ギターを掻き鳴らし、自身の音と言葉で自分の内面を歌い表現する世界は、当時の音楽シーンに衝撃をあたえました。

1971年、収録曲「カレーライス」がヒットしたアルバム「満足できるかな」は、多くの賞

を受賞しました。

日本語のロックの礎を築いた草分け的存在であると同時に、現在でもジャンルにとらわれない純音楽として自由に過激に音楽と対峙し表現し続ける姿勢は、若い音楽家達にも多大な影響を与え支持されています。

※浦沢直樹原作の漫画「20世紀少年」の主人公ケンヂ（遠藤健児・エンドウケンジ）のモデルと言われています。

遠藤さんは、ご自身のブログに常陸太田のことなどを書いています。http://enken.com/

今回取材をする中で、ひとつひとつの物語の中に見えたものは、人と人との心のつながりでした。校歌のワンフレーズを思い出すとき、そこには心の奥にある故郷の人たちへのあたたかい思いがあります。皆さんも、アルバムの表紙を開いてみませんか？
(関根 悦美)

ちよつとひといき おかしの店「あひるの工房」

常陸太田市大方町23(駐車場あり) TEL 0294-76-1270
<http://k1.fc2.com/cgi-bin/hp.cgi/ahirunokoubou/>
営業時間 9時~20時くらい 不定休

小さな小さな工房でコツコツといていねいにお菓子をつくっている「あひるの工房」は、国道293号大方西交差点を金砂郷支所方面に進み、上り坂途中の看板を右に入った奥の所にあります。看板焼菓子は3種類（メープル、ココナッツ、チョコチップ）の20円クッキーと「パウンドケーキ」。地元の卵や蜂蜜を使った「蜂蜜ケーキ」や「あひるのなめらかプリン」もおすすです。新作お菓子として、水府産小麦粉と地元の食材を使った2種類の焼き菓子セット「常陸の国のおかし」はカップに入っているのでプレゼントに最適。焼菓子の詰め合わせや誕生日ケーキなども相談することができます。鈴木パティシエの愛情のこもった一品と出会えるお店です。



(鴨志田 悟)

光圀公が植えた カリンの木

常陸太田 樹木と人の物語 ③

今年の秋、常陸太田市で「全国巨樹フォーラム」が開催されます。樹木はその姿の中に、育った土地の風土を内包し、巨樹は悠久の時の流れさえ感じさせます。フォズでは巨樹ではないけど、人に愛された樹木をご紹介します。樹木と人が紡いできた物語です。

植林の経緯

医薬に心を砕いた義公（水戸藩主2代徳川光圀公）が、当時貿易通商港の長崎あたりから取り寄せて伊勢神社（旧社名鎮守天照皇太神宮）参詣の折、当祠官渡邊主馬の家にしばしば立ち寄り、自ら植えたものだと伝えられています。

その頃、漢方医療を重視した義公は神官たちに医学を教授し、家臣・領民の健康には心を配られ、人の命を大切にされた。

また、侍医の鈴木（旧姓穂積）宗興^{そうよ}に命じて薬の簡単な処方集を編集させたのもその現れで、元禄6年（1693年）「救民、妙薬」と題する木版の書、彰考館の名で発行された。



常陸太田市内の大樹を調べていると、光圀公が植えたと言われているカリンの木がある事を知りました。見に行ってみると、これで樹齢300年以上の木？と思う位の大きさでした。けっして大樹ではないけれど、光圀公の人の命を大切にしていた思いが、このカリンの木を育んできたように感じられました。（中里 勇）



■カリン（花房町）

幹周 1.4メートル

樹高 約10メートル

樹齢 300年以上

淡紅色の花が咲き、黄色の実を付けます。

古来、カリンの実は「喘息」や「風邪」に効くとされていた。

生涯学習情報誌「フォズ」は、2～3ヶ月毎に発行し、市内全世帯に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

◆広告を募集している情報誌

平成23年7月から平成23年9月までに発行予定の
生涯学習情報誌「フォズ」第56号から第57号

◆広告料（1回あたり）※会長が指定するページの最下段

① 縦4.5cm×横 8.8cm／10,000円

② 縦4.5cm×横17.9cm／20,000円

問合せ

フォズ・ネットワーク事務局
（生涯学習センター内）

TEL:0294-72-8888

URL:<http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu/>

ふるさと
の
伝承・暦①

季節の節目をいどころ伝承行事が今見直されつつあります。日々の生活の中にある地域性に富んだ風習、いにしへの暮らしや暦に結びついた神事などをご紹介します。

5月22日(日)～毎年5月第4日曜日 鹿島神社の御田植祭(大方町)



巫女さんによる浦安の舞の奉納

今年で6回目を迎える鹿島神社の御田植祭は、長い準備の時間を経て新しく生み出された鹿島神社の神事です。旧暦6月14日に祭礼が行われていた記録があり、本殿を新しくしたことをきっかけに時期の重なる御田植祭を行おうと発案されたのが宮司さんの多賀谷謙豊さん。氏子の皆さんたちと検討を重ね、開催にこぎつけたのが平成18年のことでした。

田植に使う苗は、伊勢神宮から種モミをいただき多賀谷さん自らが苗を起こします。秋に実った稲も、しめ縄の中は宮司さんが自ら刈り、御田植祭に協力いただいた早乙女さんや氏子さんたちに11月1日、一升ずつ記念に配るのだそうです。



早乙女20名が横一列にならび田植を行います。



この日、男性は「おかまわり」で苗を早乙女さんに投げ渡します。この投げ方の上手下手で、女性たちは「男定め」をしたと言われています。

子育て奮闘記

踊るママパラダイス 54

校庭にはえたキノコやマゴボウの実を食べる。押しではいけないボタンを押す。池に落ちる。棒で車をたたく。学校の備品を壊す。

これらはコースケが今までにした、世間を騒がせ我が家を震え上がらせた行動の数々です。が、実はほんの一部。他にもありますし、私の耳に届いていない事もあると思います。

最近では、こういった本能でしてしまう失敗が減りました。自分でコントロールしている部分と、関わってくださる先生方のおかげだと思っています。

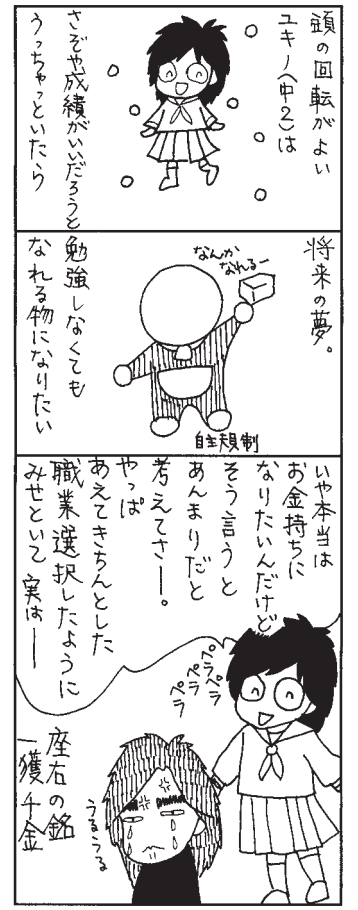
人より成長が遅いコースケです。今まで書いてきたように、彼の行く手をすべて掃き清めてあげるには限界がありますが、社会のルールを教えるのは必須です。社会の中で彼自身が経験し失敗して学習する事も大切です。どんな子どもにも共通する事でしょうが、人に迷惑を掛けない、人を傷つけないための術は教え続けたいと思っています。

継続は力なりという言葉があります。実にその通りだと思います。教え続けること、そして本人が学習し続けること。それは時間と根気の勝負です。こんな風に書くと、私が毎日修行しているみたいで聞こえますが、案外のんきにやっています。むしろ、いろいろ不自由な事が多いコースケがよく私の言葉に答えようと頑張っていると感心しています。反抗することもできるのに決められた手伝いを毎日こなし、やってはいけないと言われた魅力的な事柄に手を伸ばさないように我慢する。私ならちゃぶ台をひっくり返していることでしょう。

先日、彼が布団を上げた後の押入を開けて大変驚きました。そこには、3組全て輪の部分が外向きに整えられた布団が美しく収まっていました。それは、私が教えた覚えのない整然とした美しい姿でした。聞いてみると「この方がキレイです。」とのこと。彼の努力を知った瞬間でした。

— わいわいネット 織田 裕子 —

育て方まちがえましたか!?



リレー
エッセイ

「思い出の絵本」 『まんが日本昔ばなし』

～53～

(花房町 井坂 美佳)

「坊やよい子だねんねしな～」のフレーズで始まるこの歌を、おそらく多くの方が耳にしたことがあるかと思います。TVアニメとして放送されていた『まんが日本昔ばなし』ですが、本としてシリーズ化されたものを、私は小学生の頃、よく読んでいました。

桃太郎やかぐや姫、一寸法師など、広く知られた話はもちろんですが、このシリーズには、日本各地で言い伝えられている地方ならではの話も数多く含まれ、あきずに読むことができます。最近、読書に興味をもつようになった小一の子どもたちも、意外に面白いと言って読んでいます。

昔話には、正直者や努力した者が報われる話や欲を出すとバチがあたる話など、物事の善悪やモラルを表していたり、人として生きる上での大切な心得を伝えていたりするものがあります。幼い頃、そうした昔話を引き合いに出され、「嘘をつくとなんま様に舌を抜かれるよ。」などとよく言われたものでした。時代は変わっても、昔話には、伝えていきたい普遍的なものがあり、それをユーモアや恐さ、楽しさや悲しさを混じえて伝えているところに、昔話の魅力を感じることができます。昔話は地味でつまらなそうと思われるかもしれませんが、「ひょっとこ」は「火男」から、「部屋」は「屁をする小屋」から、といった語源説のある昔話など、ユニークな話もたくさんあります。昔話の奥深さというものも、ぜひ味わってみてはいかがでしょうか。

(次回は 大里町 古目谷 富士子さん)



ほつ
とひといき

オオハクチョウ (大白鳥)

冬になると、シベリア方面からハクチョウが渡ってきて、各地の湖沼や川面、水田で羽根を休めています。

ハクチョウは、渡り鳥で、夏の間にシベリア地方のツンドラ地帯で産卵し子育てをします。そして、厳冬期には氷に閉ざされてしまうため、温暖でエサが豊富にある日本へハクチョウと一緒に飛来して過ごします。

4月上旬になると、ハクチョウたちはシベリアへ帰る支度を始めます。冬の間水草や穀物などのエサをたづね食べて栄養を蓄えたハクチョウたちは、3,000kmもの長い渡りへと旅立ちます。



2月半ば、水辺で何気なく鳥たちを眺めている時、珍しい光景を目にしました。ハクチョウが3羽一緒に並んで水面を飛び立とうとしていました。これは親子です。後ろから眺めると、両親のハクチョウが子ハクチョウと一緒に飛び立つ訓練をしているのが分かります。子ハクチョウは親に比べて全体が灰白色をしています。来年、ハクチョウが来た時に、一度見てはいかがでしょうか。(古平 均)

花ニラ (西洋あまな)

春、太田落雁(栄町)付近は一面雪が積もったように真っ白になります。斜面いっぱい咲く「花ニラ」が雪のように見えるのです。星形の白い花で、葉っぱをちぎるとニラのようなにおいがします。球根でも種が飛んでも増えるのでこのような群生を所々で見かけます。(塩原 慶子)



後記

この度の地震によって、常陸太田市にも大きな被害がもたらされました。罹災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

今回お届けいたしましたフォズ55号は3月上旬に原稿を準備したものであり、今後の状況によっては事業等の内容に変更が出る可能性もございます。なにとぞご了承くださいませようお願いいたします。

また、この度、震災の被害を心配して、大勢の方々から電話やメールなどのご連絡をお受けになったことと思います。そんな方々へ今後の復興に向けて踏み出す一歩をお伝えするのに是非この葉書

をご利用くださいと常陸太田市の風景を描いた絵葉書を頂きました。部数に限りがございますが、生涯学習センターの窓口にてお渡しいたしますので、どうぞご利用ください。

■4月30日(土) 午前8時から100部(5枚セット) 配布いたします。尚、無くなり次第終了とさせていただきます。

(フォズネットワーク会員一同)

